クラウドファンディング 実施報告書

「若者に安心して失敗できる一人暮らしを提供したい」

もくじ

ごあいさつ…… 1
1. NPO 法人コミュニティワーク研究実践センター「若者居住支援事業」 … 2
2. ユースハウスナビ事業 …… 3
3. ユースサポートハウス事業 …… 4
4. 利用者属性 …… 8
5. ユースサポートハウス利用者アンケート …… 10
6. 利用者アンケート考察 …… 15
7. 支援事例 …… 17
8. 夕食会 …… 20
9. 事業を実施して …… 22
10. リターンについて …… 23
11. エピソード編 …… 25
12. サンクスコメント …… 29
13. 決算書 …… 30
14. コロナ禍の中で …… 31
15. 課題と提言 …… 32

ごあいさつ

この度は、レディフォーで実施いたしましたクラウドファンディング「若者に安心して失敗できる一人暮らしを提供したい」に118名の方から、1,125,000円というご支援を頂き誠にありがとうございます。法人の役員及び職員を代表しお礼申し上げます。

当法人では、３年前から若者居住支援事業に本格的に取り組んできました。これまで沢山の若者たちと出会い、寄り添ってきた私たちでありますが、「居住支援」をキーワードに考えてみますと、「経済的困窮」や「失業」だけで語ることは難しいと考えています。社会情勢の変化などにより、本来は家族が担ってきた役割や家庭内での関わりというのが難しくなってきている印象を受けます。家族がいない若者は、大人に成長するまでの間は「施設」が担うのですが、「期限付き」のものであります。

私たちが居住支援を行う場所には、「寮母さん」が常駐しています。居住支援の現場には、経験・知識が豊富な支援員を配置し、様々な問題解決のサポートをしています。面白いことに若者たちは、何か決断をする時には「寮母さんと相談して決めます」と、皆さん言います。
皆様とお約束した「若者らしい、安心して失敗できる一人暮らし」
支援現場の安心材料、信頼要素としては、専門職の配置というのがひとつの基準とされることが多いのですが、では、若者たちはどうなのか？
若者が「安心」して暮らしていくには、「失敗しても失わない環境」と「家族のような第３者」が必要なんだろうと感じています。

この報告書は、より深く「事業」をご理解頂くため、皆様からご支援頂きましたプロジェクトと、2019年度福祉医療機構助成金（WAM）で実施した「困窮する若者の生活訓練・住居確保総合支援事業」の結果も合わせて掲載させて頂いています。

参加した若者たちは沢山の人に「応援してもらっている」ということを知っています。孤立していた若者にとって、この「沢山の方々の応援」を実感できることは、税金を使い実施される行政のサービスとは、違った効果を若者に届けることが出来たのではないかと思います。
プロジェクトに参加した若者は、プロジェクト終了後も、ここでもうしばらく「暮らしたい」と話されています。仕事に就き、お金をためて自立することも大切でありますが、「安心できる環境」で、様々な経験や出会いを重ねていく中で、自然と旅立つ日が来るのだろうと思います。今後も温かい目で、若者たちを見守って頂ければと思います。ご支援頂き、本当にありがとうございました。

理事長　穴澤義晴

1. NPO 法人コミュニティワーク研究実践センター「若者居住支援事業」

（1）事業概要

①若者に安心して失敗できる一人暮らしを提供したい

予算根拠：クラウドファンディング（118名の方から支援）
事業内容：ユースサポートハウス（２部屋）
・居宅場所を提供しての生活訓練、生活支援、就労支援の実施
・夕食会の開催
対象年齢：15歳から39歳までの方
実施期間：2019年9月1日～2020年6月30日

②困窮する若者の生活支援・住宅確保総合支援事業概要

予算根拠：福祉医療機構助成金（WAM）
事業内容：❶ユースハウスナビ事業
・入居のための支援
・未成年者への住居の借り上げ（1部屋）
・入居後の見守り支援
❷ユースサポートハウス事業（4部屋）
・居宅場所を提供しての生活訓練・生活支援・就労支援の実施
・夕食会の開催
対象年齢：15歳から39歳までの方
実施期間：2019年4月1日～2020年3月31日

皆様にご支援頂いた①事業と、WAM助成の②事業を組み合わせて実施することで、より効果的な若者向けの居住支援事業を実施することができました。

2. ユースハウスナビ事業

（1）事業目的

●住宅確保が難しい若者の住宅確保を目的に、不動産会社・保証会社・家主と連携しながら住宅確保支援を行う。

●居宅生活後の生活破綻の防止。

（2）事業内容

●若者向けの住宅確保支援及び継続的な自宅への訪問、見守りを実施。
【未成年向け住宅確保サービス】※１部屋

●法人が住宅を契約し借り上げ、家主と家賃の支払い状況、生活状況を共有しながら、未成年者が成人した際に契約名義を法人から本人に変更する。

※３名の未成年者から、サービス利用について相談があったが、利用には至らなかった。そのため、ユースサポートハウスとして活用した。
（家族関係回復・ユースサポートハウスの利用）

（3）ユースハウスナビ事業利用の流れ

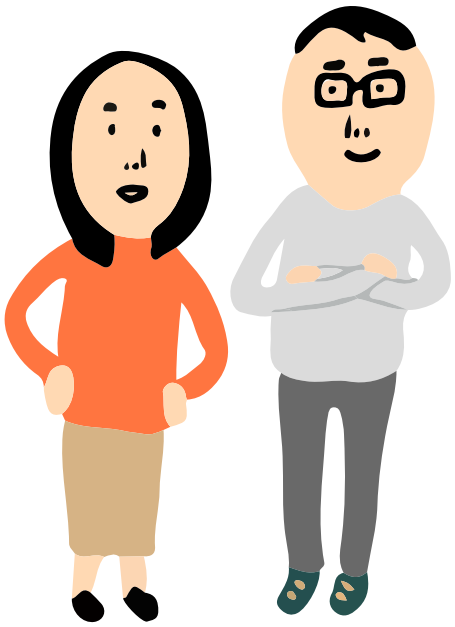
①本人･関係者からの連絡

②事業説明

③状況確認【面談】

④サービス利用申し込み

⑤サービス利用開始



（4）未成年向け住宅確保サービス利用料（家賃など）

●家賃：35,000円

●水道・ガス・電気等は本人が直接契約

※家具家電付き。食材等の提供は行わないが、週１回フードバンクを配布。

3. ユースサポートハウス事業

（1）事業概要

様々な理由で「自立（自己実現）」が困難な状況にある若者を対象に、収入状況・生活能力・生育環境を考慮しながら、居宅場所、食材を提供し、相談支援、生活訓練、就労支援を実施。週３回、共同リビングで、食事会を開催。

（2）定員

①若者に安心して失敗できる一人暮らしを提供したい

２名

②福祉医療機構助成金（WAM）

５名　※１部屋は未成年向け住宅確保サービスを利用

（3）ユースサポートハウス利用の流れ

（４）段階的な支援

居宅場所を提供し、生活習慣の改善・一人暮らしに向け、個々の段階に応じた生活訓練・就労支援を実施。「家賃や生活費」を支払う習慣を身につけるため、段階的に利用料を徴収した。

●若者に安心して失敗できる一人暮らしを提供したい

段階	第１段階	第２段階
対象イメージ	・収入がない ・就労を開始したが収入が不安定	・就労を開始し収入が安定
利用料の徴収	無料	１日1,200円
生活支援の実施	実施	
食材・生活消耗品の提供	事業費負担	
夕食会参加費	無料	

●福祉医療機関助成金（WAM）

段階	第１段階	第２段階	第３段階
対象イメージ	・収入がない ・収入が不安定	・就労を開始	・就労を開始し、３月以上が経過。
支援期間（目安）	３月	３月	６月
利用料の徴収	無料	１日1,000円	１日1,500円
生活支援の実施	実施		
食材の提供	事業費負担 ※第３段階の若者に対しては、自立に向けて少しずつ自分で購入してもらう。		
夕食会参加費	無料		

（５）支援内容

共通の支援内容

- 居宅場所（個室、家具家電付き）の提供
- 食材、生活消耗品の提供
- 食事会の実施
- 自炊支援
- 金銭管理 ※銀行への同行・家計簿をつける・通帳等の預かり
- 清掃指導
- 入浴、洗濯するよう声がけ
- 身だしなみの確認
- 就労支援（面接練習・履歴書の書き方）
- 生活相談
- 居場所づくり事業への参加
- 行政機関、支援機関への同行
- 年越し親睦会の開催など

【若者に安心して失敗できる一人暮らしを提供したい】で大切にしたこと

●親との関係改善を強制しない

●「余裕」がある対応

・利用期間を柔軟に設定する
・１日以上（時が解決する、をできる）
・利用回数に制限はなく、何度でも、何回でもやり直せる。

●「普通の一人暮らし」ができる

・友人や交際相手を招き入れてもいい
・門限を決めない
・若者が自分で生活を設計できるようになる部屋

●生活サポート【基本的な生活能力の獲得】

・仕事をしながら掃除・炊事・洗濯など基本的な生活習慣を身に付け、継続できるよう支援員がサポートする。
・必要に応じて生活用品の買い物へ支援員が同行

●金銭管理

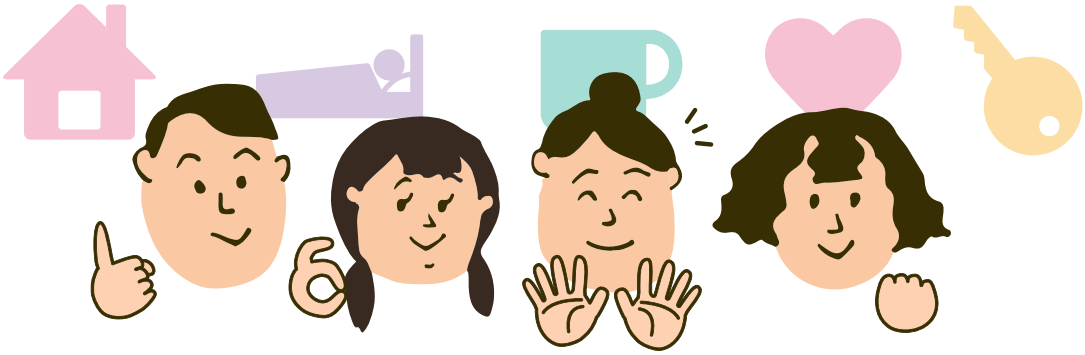
無理をしないで貯金に取り組めるよう、ある程度は趣味にお金を使えるようにする。

（6）居室

●若者に安心して失敗できる一人暮らしを提供したい

●福祉医療機関助成金（WAM）

個室設備：ベット・布団・テレビ・炊飯器・冷蔵庫・座卓・電子レンジ・
トースター・収納棚・食器・調理器具 ・ストーブ・洗濯機・
洋式トイレ・ユニットバス

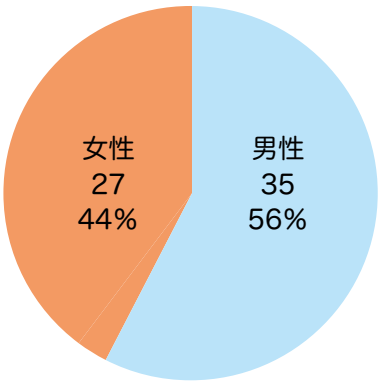


4. 利用者属性

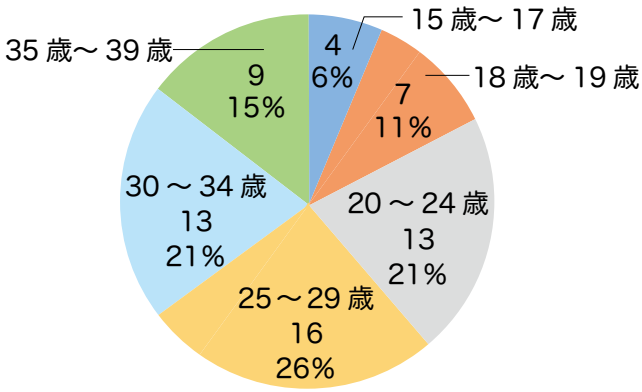
（1） ユースハウスナビ相談者（62名）※福祉医療機構助成

（期間：2019年４月１日～2020年３月31日）

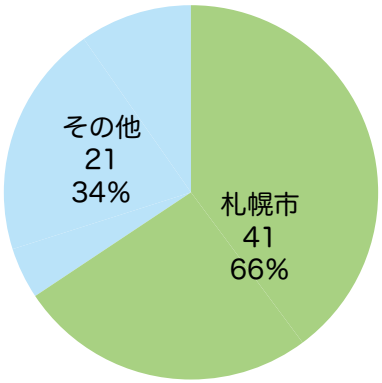
①性別

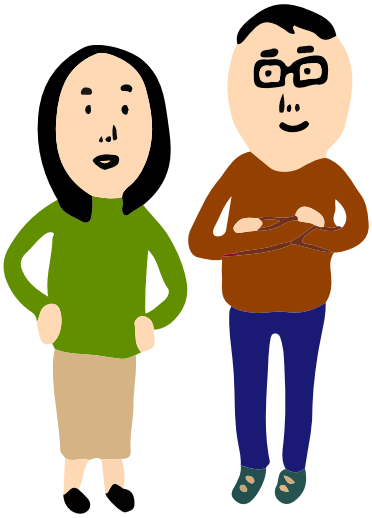


②年代

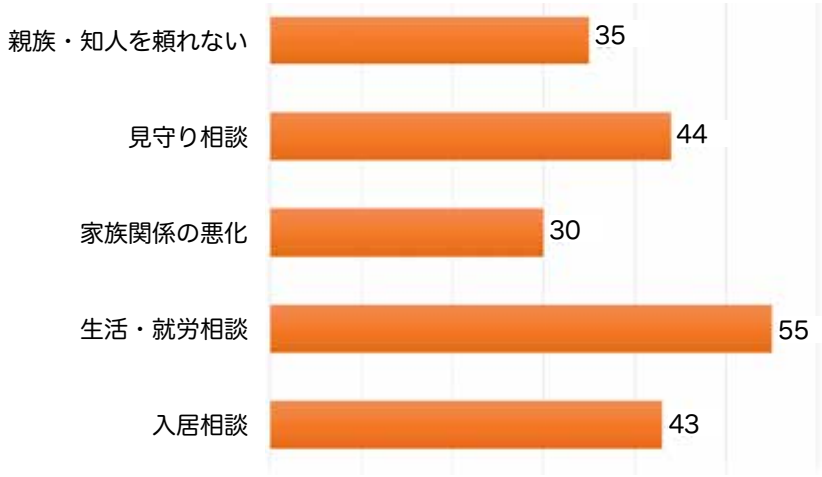


③相談地域





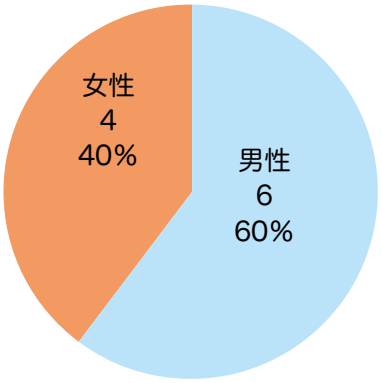
④相談内容



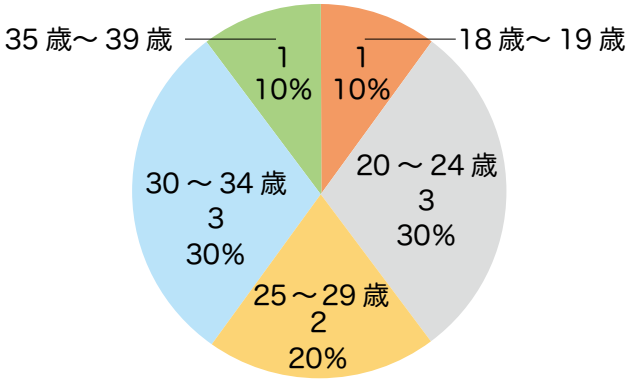
（２） ユースサポートハウス事業利用者（10名）

※若者に安心して失敗できる一人暮らしを提供したい内２名

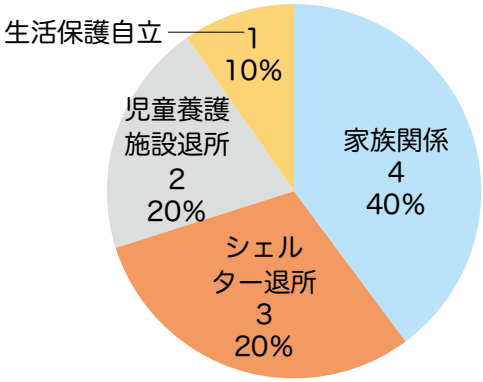
①性別



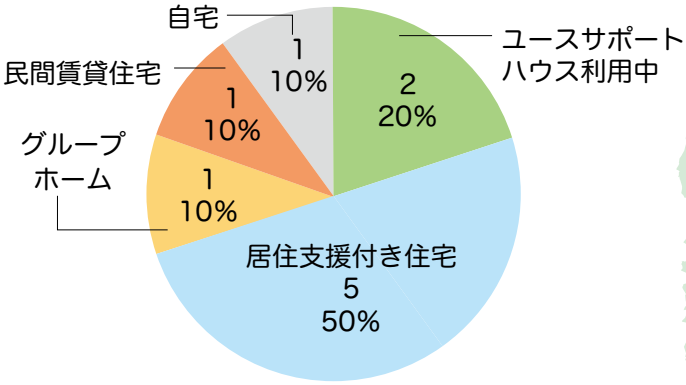
②年代



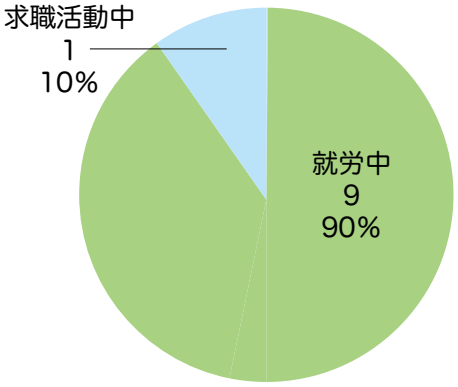
③相談開始時



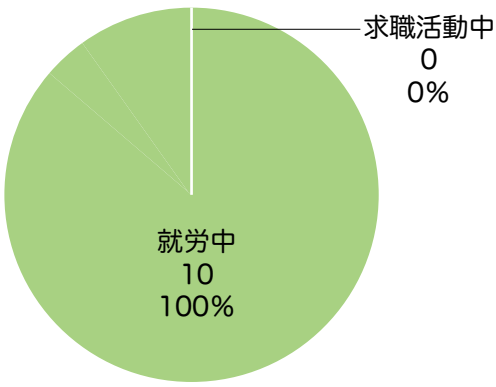
④6月30日の居宅状況



⑤相談開始時の就労状況



⑥6月30日の就労状況



※１月以上の利用者を対象に実施

5. ユースサポートハウス利用者アンケート

（１）利用を開始した理由（利用者７名・複数回答可）

※若者に安心して失敗できる一人暮らしを提供したい内２名

理由	回答
居住場所がない	7
経済的理由で住宅を借りることが困難だった	6
保証人・緊急連絡先の問題で住居を借りることが困難だった	6
金銭管理が苦手なため	4
生活習慣を身につけるため	4
一人暮らしが不安なのでサポートが必要なため	6
家具・家電を揃えなくていい	7
その他	4

（２）ユースサポートハウスに入居して良かったこと

①利用料・生活費が安い

良かった	普通	良くない
5	2	0

②就労や生活に困った時に相談できる相手がいる

良かった	普通	良くない
6	1	0

③生活習慣を身につけるための支援が受けられる

良かった	普通	良くない
4	3	0

④行政手続きや医療機関に同行してくれる支援員がいる

良かった	普通	良くない
4	3	0

⑤金銭管理について相談できる支援員がいる

良かった	普通	良くない
6	1	0

⑥夕食会について

良かった	普通	良くない
6	1	0

（3）ユースサポートハウスを利用しての生活面の変化

①一人暮らしに向けての貯蓄について

十分出来ている	出来ている	普通	出来てない	全く出来てない
3	3	1	0	0

②掃除・洗濯の習慣について

身についた	まぁまぁ 身についた	普通	身につかない	全く 身につかない
5	1	1	0	0

③自炊の習慣

身についた	まぁまぁ 身についた	普通	身につかない	全く 身につかない
7	0	0	0	0

④金銭管理について

身についた	まぁまぁ 身についた	普通	身につかない	全く 身につかない
6	0	1	0	0

（4）ユースサポートハウスを利用しての就労面の変化

①就職活動について

積極的に している	まぁまぁ している	普通	していない	仕事をしていたので 必要がない
4	0	0	0	3

②就職について

希望の職種に 就職できた	希望の職種ではないが 就職できた	就職活動中	元々、仕事をしていた
2	2	0	3

③仕事を継続するのに重要なこと（複数回答可）

住まいの安定	職場環境	やりがい	収入	人間関係
7	6	5	5	6

④仕事の継続について

継続して いきたい	少し悩むが 継続したい	就職活動中	辞めたい	すぐにでも 辞めたい
6	1	0	0	0

⑤現在の１月の生活するための収入について

５万以下	５万～10万	10万～15万	15万～20万	20万以上	就職活動中
0	1	3	3	0	0

⑥現在の貯金の金額

なし	5万～10万	10万～20万	20万～35万	35万～50万	50万以上
1	1	2	1	1	1

⑦ユースサポートハウスを利用してからの就労収入について

増えた	変わらない	就職活動中
7	0	0

（5）ユースサポートハウスを利用してのその他の変化

①家族・親族関係について

良くなった	少し変わった	変わらない	悪くなった	家族・親族がいない
3	0	4	0	0

②友人関係

良くなった	少し変わった	変わらない	悪くなった	友人がいない
3	3	0	0	1

③これまでの生活と比べ自分自身が良かったこと（複数回答可）

友人知人が出来た	親にうるさく言われない	自分の部屋がある	自分のペースで生活できる	相談できる人がいる
6	3	5	7	7

④今後の生活について

安心	なんとかなるさ	普通	不安	すごく不安
4	2	1	0	0

⑤ユースサポートハウスでの支援はどのくらいの期間必要だと思いますか？

１月	３月	半年	１年	１年～２年	２年以上	期間を定めず 安心するまで
0	0	0	0	3	1	3

⑥ユースサポートハウスを利用しての感想と今後の課題　※自由記述

- ●夕食会で、色々な人（大人）の経験を聞けたことは大きい。
- ●同世代の人の知り合いができたのが嬉しかった。
- ●自炊をする習慣が身についた。掃除をしようと思えるようになった。
- ●家族との関係が少し良くなった。
- ●もう少し、利用料が下がれば、なお嬉しい。
- ●安心して生活できるようになった。
- ●コロナの影響で、食事会が中止になったのが残念！

2020年２月末からコロナウィルスの感染拡大防止のため
食事会は中止となり、お弁当の配食となりました。

6. 利用者アンケート考察

(1)入居して良かったこと

利用料金の安さや相談できる相手がいることは、利用する若者にとって、メリットは大きかったものと思われる。夕食会については、7名中6名が良かったと回答している。昨年度から夕食会は開催しているが、今年度は特に、参加者同士の交流や情報交換に力を入れてきた。多様な世代・経験を持つ大人との出会いは、アンケートだけでは見えない学びや発見があったものと思われる。

「金銭管理」については、利用当初は苦手な若者が多かったが、毎月、支援員と収入と貯金・生活費の使い方について相談することで、お金の使い方について考えるきっかけ・意識改善につながる若者が多かった。

(2)生活面での変化

貯金については、できていると回答した若者が多かった。これは（1）でも記載した通り、金銭管理について丁寧にサポートした結果である。また、清掃や自炊についても利用開始時は苦手な若者も多かったが、 定期的に部屋に訪問し、支援員と一緒に行うことで、「習慣」として身につけることができていた。

(3)就労面での変化

仕事の継続については、住まいの安定と若者全員が回答していた。

この他、人間関係や職場環境についても回答が多かった。夕食会や個人面談などを通じて、人間関係について不満をもらす若者も多く、収入ややりがい以上に「環境」というものが、社会に出始めの若者にとっては重要な要素である。今回は、全員の若者が増収につながった。これは、ユースサポートハウスの利用により生活環境上のストレス要因から離れることで、仕事に向かう気持ちが整い、シフトの回数を増やすなど、増収につながっていた。就労収入については10万円以上の若者が6名、10万円以下が1名となっている。

転居に向けて貯蓄を開始し、10万以上の貯蓄ができた若者が5名いる。

(4)その他の変化

家族との関係性に課題を抱えている者も多く、離れて暮らすことで関係が改善される者もいた。友人については、生活が落ち着くことで、再び連絡をとりあうことを開始した若者もいた。

これまでと比べて良かったところでは、「知人・友人が出来た」と６名の若者が回答している。これは、同世代だけでなく、夕食会に参加して中高年世代とも日常的につながりをもち、冗談を言い合うなど様々な世代の「友人」やつながりが出来たことを指している。

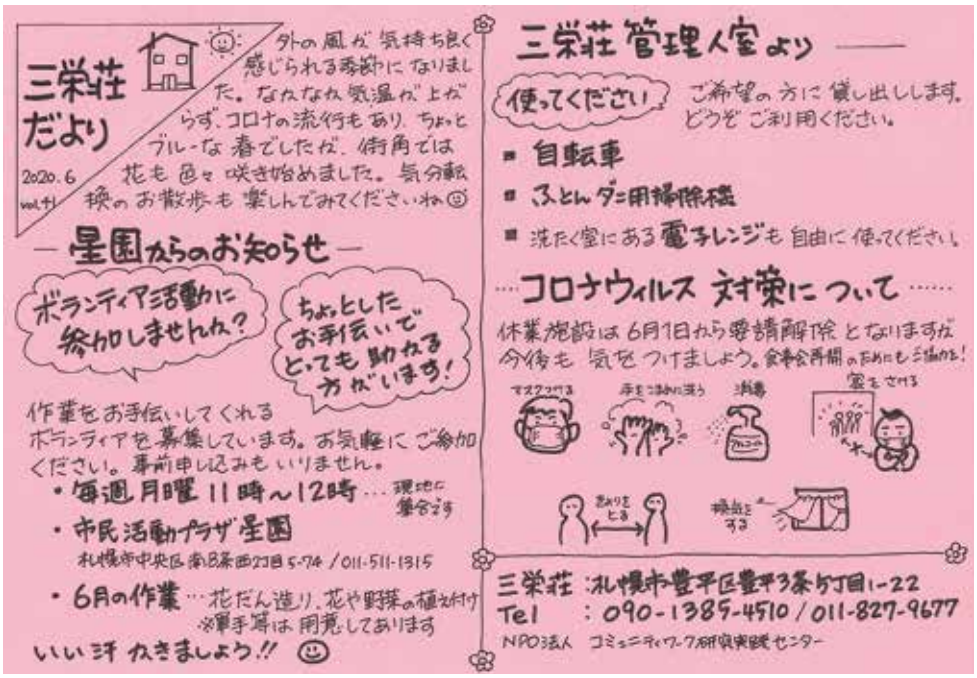
また、今年度参加した若者の大きな特徴につながるが、ユースサポートハウスから離れることで、相談相手がいなくなることに強い不安を感じている若者が多かった。実際には卒業後も自宅への訪問・定期的に夕食会に参加するなど、つながり続けてはいる。

一度は生活課題は解決され、生活は安定するが、家族に頼ることが難しい若者は生活基盤が脆弱のため、危機的状況に陥る可能性が高いことを自覚しているのかもしれない。

また、自身の部屋や自分のペースで生活できることについても良かったと回答する若者が多かった。

(5)支援期間について

全員「１年以上」の支援を望んでいた。ユースサポートハウス事業が単に通所型の若者支援ではなく、生活の場に入り込むサポートであるため、「本人が抱える不安」を解消できるまでの期間、じっくりとサポートする体制が若者に望まれているのだと考える。



7. 支援事例

■20代・男性（ユースサポートハウス）

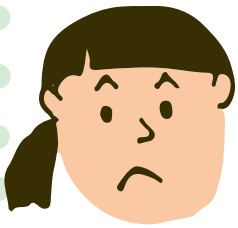
※クラウドファンディング

高校生の時に、両親を亡くし、児童養護施設へ入所。高校３年生の時に大学を受験したが失敗。高校卒業後も、大学受験の勉強をしながら施設で生活。長期間施設で受け入れることが難しいため、施設を退所し、一人暮らしを開始。家事、受験勉強に加え、週５～６日のアルバイトを２年間続けてきたが、思うように勉強が出来ずにいた。

2019年６月、受験勉強とアルバイト生活の疲れからメンタル不調となり、うつ病と診断される。アルバイトも休みがちになり、経済的に困窮。生活保護を検討したが、大学費用を必死で貯めてきたため、生活保護の利用は難しかった。浪人生を支援する公的な仕組みはなく、2019年9月、ユースサポートハウスに入所。アルバイトの回数を減らしながら国公立大学を目指し、勉強。受験は不合格であったが、大学受験を諦めることを決断。（本人としては凄く納得していた）コロナ禍の中、就職活動を行い、電気工事を請け負う会社に４月に入社し、非常事態宣言を受け休業した時期もあったが宣言が解除され、元気に仕事を継続している。

■20代・女性（ユースサポートハウス）

※クラウドファンディング



幼い頃から、生活保護を受給し生活。高校に進学するが周囲に馴染めず中退。中退後は、アルバイトをするが、生活保護が廃止になってしまうと母親と何度も口論になった。また、アルバイトをしたお金も生活費にまわるだけで、何も買えずにいたことから、家出をして友人宅を転々としていた。アルバイト先で、生活の状況について相談した際、札幌市のホームレス相談支援センターの紹介を受け、シェルターへ入所。シェルターで半年過ごしたが、一人暮らしを開始するには不安があるとのことで、ユースサポートハウスを2019年11月から利用。

入所後はアルバイトを継続してきたが、もう少し収入が高いところを目指したいと、コールセンターに転職した。また2020年1月、母親との関係が改善され、実家に帰省。水落としをせずに外出したため、水道管が破裂。本人の部屋及び階下の部屋が水浸しとなり、別の部屋に移動し生活を送った。夕食会を通じて、世代を問わず人間関係がひろがった。

コロナ禍に入り、札幌のコールセンターでクラスターが発生し、就労について不安を感じる時期もあったが、休業などは特にせず通常通り出勤できた。

2020年6月になり、雇用調整助成金を就労先が申請するため、給料の６割を

支給するので１週間休むように言われ不満を感じたが、仕事は継続していきたいとのこと。また、コロナ禍で部屋の改修が遅れていたが、6月20日に戻ることができ、喜んでいる。

■30代・男性（ユースサポートハウス）

高校卒業後、大学へ進学するが中退。大学中退後は、実家の家業を手伝う。

その後、実家の家業を10年程手伝ってきたが、自宅からはほとんど出ることなく引きこもり状態となる。就労に向け動き出そうと、生活困窮者自立相談支援機関へ相談。相談支援機関の支援を受け、徐々に家から出る機会を増やし就労を開始。しかし実家の両親との関係が悪く、それが原因となり退職。両親への苛立ちを抑えることが難しくなり、ユースハウスナビ事業の相談につながる。

実家を離れて、一人暮らしを強く希望していたが、一人暮らしの経験がなく不安も強かったため、ユースサポートハウスの利用を開始。その後は、夕食会の手伝いに参加し、料理を少しずつ覚え、一人でも作れるようになった。掃除・洗濯なども週１回確認し、不明な点は支援員と一緒に作業をすることで覚えた。入所から１月半後、就労を開始。両親と生活していたときのようなストレスはなく、現在も仕事を続けている。また、年末には実家に一度戻り、両親にも近況を報告し、徐々に関係改善につながっている。

■20代・女性（ユースサポートハウス）

中学の頃から周りと話題が合わなくなり、不登校になる。高校に入学しても状況は変わらず、海外へ留学。留学先では言葉の不自由さはあったが、気風が本人にはマッチし、友人もたくさんできた。

帰国後は、２年ほど自宅へ引きこもり、その後、化粧品会社へ就職したが、同僚とうまく人間関係を築けず退職。自宅に居ることが多く、母親から「どうして働けないのか？」・「どうして周りと上手くできないのか？」と毎日のように言われ、関係が悪化。相談につながる。

本人は実家から出ることを強く希望していたが、一人暮らしに対しての不安も強く、週３日、実家から出て一人暮らしの練習の場としてユースサポートハウスを活用。利用当初は部屋に一人でいることに不安を強く感じ、実家に戻ることも度々あったが、食事会への参加やその準備を手伝うことで、他の利用者との交流が生まれ、お互いの境遇・これまでの経緯について話をすることで、孤独感が解消され、不安が軽減された。利用後、４ヵ月が経過し仕事を開始。

離れることで母親との関係は改善された。本格的な一人暮らしを目指すため、一度実家に戻った。仕事を継続しながら、週１回程度、食事会に参加し、近況を話してくれている。

■20代・女性（ユースハウスナビ）

母親との関係が悪く、中学校卒業後、道内の自立援助ホームに入所。

１年ほど自立援助ホームで過ごすが、職員との関係が悪く退所。その後、交際相手と同棲を20歳まで続ける。交際解消後は、自らアパートを借り自立した生活をしてきたが、勤めていた会社の退職をきっかけに家賃を滞納し、自宅を失い知人宅で過ごす。

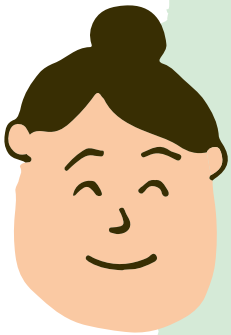
知人には毎月家賃８万円を支払いながら、お金を貯めてきた。

知人との関係が悪化し、家から退去するよう求められ、不動産会社に相談にいくが、緊急連絡先や保証人の確保が難しいため断られた。住宅確保が難しい状況について支援機関に相談し、ユースハウスナビ事業につながった。本人は就労を継続しており、一人暮らしをする力も備わっていたことから、未成年用の部屋を転用し、入居。

入居後、定期的な面談を行いながら生活状況を確認している。

仕事を継続しながら、交際相手と結婚に向け、資金を貯めている。

■30代・女性（ユースハウスナビ）



高校卒業後、就職。実家で生活していたが、夜の仕事で知り合った男性と交際し、二人の子供を授かる。

婚姻状態はなく、男性が自身の子どもであると認めず、交際が終わる。１度、実家に戻るが、その後もストレスがたまると、家を飛び出し、男性宅を転々とする。同居していた母親が、これ以上育児や本人の面倒をみることが難しく、出ていくよう本人に伝え、相談につながる。

本人は貯金などはなく、生活保護の相談に行くが、実家に暮らしていることから生活保護は該当しないと言われた。母子福祉資金について紹介され、母子福祉資金について相談。連携する不動産会社Aに相談し、アパートを見つけ、転居費用の貸付を受けることが決まり、転居した。

その後、生活保護を申請し就職活動を開始。母親と離れることで関係も回復し、現在は母親の協力を得ながら、近隣のスーパーで働いている。転居後も見守りは継続し、月１回程度、訪問している。

母親が落ち着くことで、子どもたちも安定して保育園・小学校に通えている。

8. 夕食会

（1）事業概要

ユースサポートハウス利用者を対象に、週３回夕食会（夕食の提供）を実施。施設退所者・一人暮らしの若者についても食事提供を行い日常的な見守りと生活破綻の早期発見の場として活用した。若者の中には、自身の将来像を想像できない若者も多いことから、若者世代以外の中高年・高齢者についても、有償（１食400円）で参加。食事を通じて、多様な生き方の大人と出会うことで、自身のロールモデルの発見や人生の再考につなげる機会とした。

※コロナウィルスの影響で、2020年２月末北海道知事による緊急事態宣言発令後は、お弁当の配食として実施。2020年６月30日時点でも同様の対応が続いている。

（2）参加人数

述べ1,857名　【内訳】若　者 1,223名
その他　634名

（3）実施期間

2019年４月1日～2020年２月29日

（4）実施日時

毎週火曜・木曜・土曜の17時30分～21時00分に開催

（5）実施回数

135回

（6）写真

（7）事業効果

- 週３回、三栄荘内の共同リビングで夕食会を開催。ユースサポートハウス利用者に対し、栄養バランスを考えた食事を提供し、食生活の見直しや自炊意欲が向上した。また、聞き取りの中では、就労継続や生活破綻防止につながったという話もあった。
- 家族、親族、友人と関係がない若者も多かったが、食事会を通じて顔を合わせる中で、孤立防止や新たなつながりの構築などにつながった。（居場所として機能）
- ユースサポートハウス退所後の利用者が、日常的に食事会に足を運ぶことで、生活の様子の変化や生活破綻の早期発見につながった。（離職や滞納などを発見出来た）
- 若者以外の世代も夕食会に参加することで、多様な経験を持つ大人との交流・人生経験の共有につながった。

※ロールモデルとの出会いにつながった。

9. 事業を実施して

住宅に関する相談は、単に住宅探しのサポートをするだけではなく、それに付随する様々な課題整理からはじまる。単に行政サービスや不動産会社との調整だけでは終わらない。一番重要なことは、相談に来た若者との信頼関係の構築である。若者との信頼関係の構築は、単に関われば出来るというものではなく、そこには共感や承認の積み重ねが重要である。

生活訓練の現場では、利用を開始した若者は、ユースサポートハウスの利用終了を望まず、長期化する傾向が今年度は見られた。お金を貯めて、生活スキルを身につけ、仕事を継続できれば、若者の抱える不安は払拭できるのか？

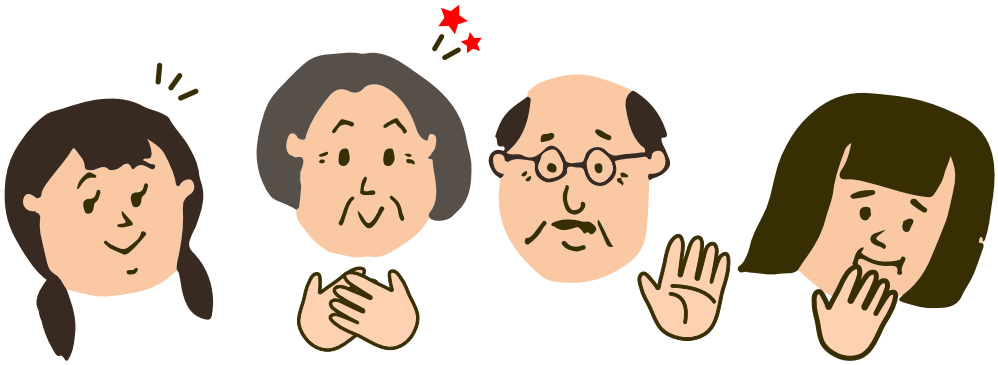
夕食会を本格的に開始し、若者が中高年や高齢者と出会い、雑談をする。また、若者同士でも仕事や恋愛・学生だった頃の話をする。

本事業を利用した若者の多くが、家族がいない者・家族関係が破綻している者が多い。また、人間関係が将来へ向かうことの阻害要因となり、何度も同じつまずきをする若者もいた。一番困った時に、私たちと出会い、生活を取り戻す。

孤立している若者は、生活が落ち着くと、困難の要因となった人間関係のもとに、再び戻る者もいる。

事業に参加した若者は、「離れる」ことに大きな不安を感じる者が多い。安価な利用料だから離れたくないのではない。家族というのは、選ぶことは出来ないが、家族というだけで、断ち切ることができない絆が生まれ、関係が良好であれば、一番心安らぐセーフティネットとなる。

一番のセーフティネットを失った、もしくは決別した若者にとって、何が必要なのか？ 卒業とは無縁の「つながりと帰る場所」、それの確実な保障が必要ではないかと考える。



10. リターンについて

（1）夕食会へのご招待

2019 年 11 月 30 日にご支援頂きました方をお招きして、ユースサポートハウス事業に参加している若者との夕食会を開催しました。

当日は、ご支援頂いた方が２名、若者が５名参加をしました。この日のメニューはキーマカレーとポテトサラダで、お昼過ぎから若者が準備をしました。緊張して中々話せない方、楽しく団欒する方など様々でしたが、会は楽しく終了し、その後は、コミュニティワーク研究実践センターの若者居住支援事業について説明させて頂きました。

（2）サンクスカードの発送について

2019 年 12 月、今回ご支援頂いた方に、今回のプロジェクトに参加している若者が一人ひとりの手書きのコメントをのせたサンクスカードを送らせて頂きました。枚数もかなりの数でしたので、「腕が痛いという声」もありましたが、１枚１枚本人たちなりに一生懸命書いていました。サンクスカードのデザインは、引きこもりの方の仕事づくりの一環として、40 代の男性にお願いして、書いて頂きました。

（3）アイピローとバードコールの発送

2019 年 12 月に今回ご支援頂いた方に、アイピローとバードコールを送らせて頂きました。どちらも、引きこもりの方の仕事づくりの一環として作っているものです。自宅から出ることが難しい 20 代の男性にお願いし、バードコールのネーム彫りをお願いしました。

（4）記念プレート

2020 年 5 月に記念プレートが届きました。記念プレートの製作は、ご本人にお会いすることが出来ていない 20 代の引きこもりの男性の仕事づくりの一環としてお願いいたしました。600 ミリ × 450 ミリとかなりの大きいサイズとなりました。

（5）報告書について

こちらの冊子が報告書となります。発送作業は、引きこもりの方々の仕事づくりの一環として実施しました。

11. エピソード編

（1） Oさん編

○1月7日新着情報より抜粋

新年早々・・・山あり谷あり・・・水難ありという感じであります。

今年の札幌は例年よりは雪は少ないのですが基本的には氷点下になることも多く、何日かお家をあけるときには、水落としをして水道管が凍るのを防ぎます。（水道管が凍ると破裂してとんでもないことになります）

お正月に、里帰りをしていたＯさんははじめての一人で暮らしで、水落としの声がけをしてはいたのですが、ちょっと油断したのでしょうか？里帰りをして家に戻ると、水道が凍結していて、解凍しようと頑張ったところ、何と水道管が破裂、天井から漏水。滝のように水があふれ、階下のお部屋も含め、浸水してしまいました。

お部屋は、水浸しになり、全面改装しないと暮らせない状態となったほか、皆様のご支援で購入した、家具・家電も利用が出来ない状態に。また、漏水のため電気が使えない状態になりました。暮らしていた女の子は別のお部屋に避難しましたが・・・しばらくの期間は暮らすのは難しいとのことで・・・改修費も含め、保険の対象になるかは不明です。

お部屋は、写真では中々伝わりにくいですが、もうとんでもない状況になっており・・・とは言え、本人は案外ケロッとしています。むしろ、周りの大人たちが右往左往・喧々諤々と・・・ こんな状況下で思うことは、多分・・・若者が安心して失敗できるためには、右往左往する大人が必要なんだろうなぁと。

事業の方は、しばらくは別のお部屋を使い継続していきます。

○6月１２日新着情報より抜粋

水道管凍結・・・そして破裂から半年。

ようやく、お部屋の修繕が終わりました。清掃はまだなのですが。ようやく、こちらの部屋に暮らしていましたＯさんが、お部屋に戻ってこれそうです。（別部屋で暮らしていました）２月からコロナの影響で・・・材料が入ってきにくくなったようで、工事のスタートが、先に先にとなっていました。

そして、今月ようやく工事がスタートし、終了まで目前と。６月 20 日くらいには、このお部屋に戻れそうです。

皆様に応援して頂いていましたこのプロジェクトも、残すところあとわずかになりました。Ｏさん、Ｇくんともに、もう少しだけここで暮らしていきたいということで、プロジェクト終了後も、それぞれのお部屋で暮らしていくことになりそうです。

○6月20日新着情報より抜粋

水道凍結・お部屋が浸水してから、６か月が経過しました。

コロナウィルス感染拡大の影響で、部屋の改装も上手くすすまず、皆様にご心配をおかけしていましたが、本日Ｏさんが無事お部屋に戻ることできました。お部屋は全面改修のため、まるで新築のような感じでした。

Ｏさんも久しぶりに自室に戻ることができ、大変喜んでおりました。

流石は・・・若い女性といいますか・・・。洋服やら何やらで、お引越しは、かなり大変で、お手伝いの男性陣もてんてこまいでした（笑）

引越しにあわせてとは、違いますが、北海道新聞の取材をＯさんに受けて頂きました。家を飛び出し、友人宅を転々として、不安な毎日で、一生こんな生活なのかと思っていたそうです。相談する時は、勇気が必要で、シェルターに入ってからも１月くらいは不安だったそうです。

シェルターを出るにあたり、一人暮らしを経験するために、今回のプロジェクトへの参加を希望されました。

参加して良かったことは？と新聞記者から聞かれ・・・
「相談できる環境で、一人暮らしを経験できたことは本当にありがたかったです」とお話しされていました。また「同じように困っている人がいたら、はじめは勇気が必要かもしれませんが、ぜひ、相談して欲しい。」とのことでした。

（２） Gくん編

○8月１３日新着情報より抜粋

20 代の G くんからご相談を受けました。
G くんは、高校生の時に、ご両親を亡くし、児童養護施設へ入所。
高校３年生の時に大学を受験しましたが、うまくいきませんでした。
高校卒業後も、大学受験の勉強をしながら施設で暮らしていましたが、浪人生を長期間、施設で受け入れることが難しいと私どものところに。
G くんは、施設を退所し、一人暮らしをはじめます。
家事・受験勉強・週５～６日のアルバイトを、３年間続けてきました。
今年６月、受験勉強とアルバイト生活の疲れからメンタル不調となり、うつ病になってしまいました。
アルバイトも休みがちになり、仕事の日数を減らすよう勧められています。
生活保護を検討しましたが、大学費用を必死で貯めてきたので、それなりの貯金があり、生活保護を頼ることも、難しい状況です。
アルバイトの継続は難しく、必死に貯めてきた学費を取り崩さなければいけない。「どうして大学に行きたいのか？」と尋ねると、「高校生の時、○○大学に行きたいとずっと勉強をしてきました。両親もそれをずっと応援してくれていたので、何としても、○○大学に行きたいんです」とのことでした。
高校３年生の夏までは「親に頼ること」・「安心して失敗すること」ができる環境でしたが、生活環境が激変。G くんの両親は、高校３年生の夏に、お二人とも

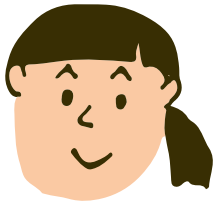
癌で亡くなりました。
　浪人生を支援する公的な仕組みはなく、大学に行くために、必死で貯めた貯金を取り崩し生活しなければ行けません。
　今後の生活をどうするのか・・・
　こんな状況だから、夢（両親との約束）をあきらめる。
　厳しい現実と向き合うばかりが、Ｇくんの未来にとって必要なんでしょうか？選択肢の一つとして、今回のプロジェクトについてお話出来ればなぁと。

○5月28日新着情報より抜粋
　20 代のＧくん（男性）、2020 年も受験にチャレンジしましたが、 惜しくも・・・思い叶わず。Ｇくんは、一区切り自分の中でついたようで、４月に電気工事の会社で正社員となり働きはじめました。
　コロナの影響で、一時会社が休業となりましたが、緊急事態宣言が解除され、元気に出勤しています。

○6月15日新着情報より抜粋
　Ｇくんはといいますと、大学の進学は一旦おいて、４月から就職して働きはじめています。※Ｇくんもコロナの影響で一時休業となりました。
　先日は､札幌も暑くなってきたので､クーラーをつけたいと相談がありました。
　クーラーのある部屋に引っ越したいと今お仕事を頑張っています。写真は、Ｇくんの制服姿です。
　残り、半月となりましたが、若者とのお付き合いはまだまだ続きます。
　若い方のご相談が私どもには多いですが、自立とは？ 羽ばたく時？
　皆様のご支援を頂き、事業を実施してきましたが、長い目で成長を見守るというのが大切なんだろうと思います。

12. サンクスコメント

■20代・女性　Oさん



①ユースサポートハウスを利用したきっかけは？

　コミュニティハウス「れおん」のシェルターを利用していて、退所先を探していました。いきなりの一人暮らしは不安で、れおんの職員さんから紹介され、利用してみようと思いました。

②利用して良かったことは

　一人で生活していくことの難しさを知れたことです。水道の凍結や一人暮らしをしながらの、家事などは大変だなぁと思いました。おかぁさんの大変さがわかりました。

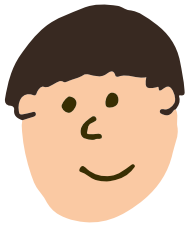
③こんな若者支援があったら助かる

　一人暮らしは、凄く不安なので、ユースサポートハウスのような、近くで相談にのってくれる人がいると助かります。食事会では、色々な人と知り合いになれたので、そんな場もあると助かります。（強制参加ではなく、行きたい時に行けるのがいい）

④今回、寄付して頂いた方へ一言

　ユースサポートハウスを利用して、色々な経験をしました。特に、水道は凍ると大変だなぁと思いました。途中、アルバイトを辞めて、転職をしたりもしました。ここでの経験を生かして、これからの人生を頑張りたいです。本当にありがとうございました。

■20代・男性　Gくん



①ユースサポートハウスを利用したきっかけは？

　精神的にも、経済的にも大変だった時に、ユースサポートハウスについてスタッフさんから紹介して頂きました。

②利用して良かったことは

　家計がすごく楽になり、精神的にも落ち着きました。大学受験にも専念できましたが、結果は不合格でした。仕事を探す、気持ちを切り替えるキッカケになりました。

③こんな若者支援があったら助かる

　家賃や生活費の援助。それと、相談できる人が、近くにいるというのは助かります。

④今回、寄付して頂いた方へ一言

　今回、本当にありがとうございました。経済的にも、精神的にも、本当に楽になりました。今回、参加したことで、前に進むきっかけになりました。

13. 決算書

〇2020年７月１日の決算金額です。
光熱水費や印刷費など確定前の金額のため、
確定後、新着情報でお知らせいたします。

①収入内訳

・寄　　付　　金：1,125,000 円（クラウドファンディング）
・事　業　収　入：648,000 円（利用料）

合計）1,773,000 円

②支出内訳

・家　　賃：527,200 円（若者が暮していた部屋）
・光　熱　水　費：184,537 円（若者が暮していた部屋）
・食　　材　　費：237,657 円
・消　耗　品　費：147,284 円（生活消耗品・食器等）
・家具家電購入費：126,072 円（テレビ・冷蔵庫・洗濯機等）
・通 信 運 搬 費：　28,131 円（リターンの郵送）
・印　　刷　　費：165,000 円（報告書等）
・委　　託　　費：　45,000 円（リターンの制作・発送作業）

※制作・発送作業は引きこもり方の仕事づくりの場として活用させて頂きました。

・旅 費 交 通 費：　　2,670 円（水道凍結の際の緊急対応）
・雑　　費：　50,300 円（シャワー等利用料）
・支 払 い 手 数 料：145,800 円（READYFOR 手数料）

合計）1,659,651 円

③決算合計

収入合計−支出合計＝ 113,349 円
※残金については、若者の自立に向けた活動に利用させて頂きます。

14. コロナ禍の中で

新型コロナウイルス感染症について、北海道では 1 月 28 日に第 1 例目の感染者が確認されました。2 月 28 日には緊急事態宣言が北海道知事から出され、週３回の夕食会も中止となり、現在もお弁当の配布という対応が続いています。このプロジェクトを利用した若者たちは、皆様のご支援もあり、就業機会の減少はありましたが、大きな影響をうけることはありませんでした。

しかしながら、支援現場では２月～６月までのコロナ禍といわれる期間に、家を失ったという若者たちから相談をいくつか受けました。

23歳のA子さん：昨年10月に家賃滞納で家を失い、友人宅に身を寄せながらすすきのの飲食店で働いていましたが、２月の緊急事態宣言以降、出勤日数が減りました。A子さんは友人との関係も悪くなり、３月中旬からはネットカフェで生活。飲食店の仕事が激減したためコールセンターで働きはじめました。４月に入り非常事態宣言が出され、東京でネットカフェが閉じたニュースをみて私たちのところに連絡をくれました。住まいは私たちで準備をし、無事に入居できました。しかしながら、札幌市ではコールセンターでクラスターが発生し、A子さんの勤めていたところで感染者が出たわけではありませんが、コロナ対策が難しいため、コールセンターは廃業、A子さんは再び仕事を失いました。A子さんは就職活動を一生懸命行う意志はありましたが、ハローワークを含めた支援機関も通所での支援は難しいとのことで就職活動は困難を極めています。

20代の男性からの真夜中のメール：派遣の仕事がなくなり、寮に住めなくなり、仕事を求めて札幌に来たが、仕事が見つからず、ネットカフェで寝泊まりをしていたがもう所持金もつきてしまい、５日前から路上生活をしている。

20代男性からの電話：彼女と生活していたが、コロナ禍で収入が減少し、彼女を養うのがむずかしくなり、（彼女は精神疾患を抱えていて働くのが困難）彼女は生活保護を申請するため、自分は家を出なければいけない。

私たちの運営している生活支援付き住宅：職場でコロナに感染した人が出たため出勤停止を受けた30代の若者がいました。ようやく就職先が決まった60代男性も、すすきののカラオケ店でお客さんが入らなくなり解雇になりました。コロナ禍がはじまり派遣先を何度も変えられた人もいました。

私どもの運営するシェルターでも、支援機関が対面での支援を控えるところも多くなり、支援しきれずに退所期限を迎える人たちが多くいます。

６月末で倒産する企業が増え、失業者が激増するのではないかという声も多くきかれます。コロナは沢山の人たちに影響を与えました。与えているという表現が正しいのかもしれません。ただ、やはり「弱い立場」の方への影響は甚大であると考えます。

テレワークが進みましたが、私たちのところで暮らす方々は、テレワークとは無縁で、毎日出勤しています。

このような現状を少しでも変えたく、クラウドファンディングを６月 15 日から、開始しました。北海道を支えよう、何があっても「失わない」・「奪われない」安心して暮らすことが出来る場所。今回、参加したＯさん・Ｇくんは、これからももうしばらくはここで暮らしていきたいと話しています。

まだまだ続くコロナ禍であります、もしよろしければ、皆様からご支援を頂き、より多くの方々に「失わない」・「奪われない」安心した暮らしを提供できればと思います。今後とも応援のほどよろしくお願いいたします。また、ご支援を頂き誠にありがとうございました。

＃北海道を支える
コロナ緊急｜北海道ー仮住まいから本当の住まいへ
絶賛‼ クラウドファンディングに挑戦中！
https://readyfor.jp/projects/cmtwork

15. 課題と提言

●はじめに・・・

平成29年度から、若者の住宅確保と生活破綻防止に向け、生活支援・就労支援を行う若者向けの居住支援サービスや、地域内でのネットワークづくり・取り組みの波及を目的とした研修会を実施してきました。

2019年にはクラウドファンディングを実施し、118名の方から支援を受け、ユースサポートハウスを新たに２部屋確保しました。政策的な視点で考えると居住支援の分野は高齢者・障がい者を中心に急加速的に進んできてはいますが、若者がそこの議論に乗り切れずにいます。何故か？ 若者の生活支援の問題は非常に必要性がわかりずらいのだと思います。この３年間でユースサポートハウスで必要と感じたことは大きく３つです。

①信頼関係の構築
②金銭教育
③つながり続けること

②は非常にわかりやすいですが、①・③は具体性に乏しくわかりにくいかもしれないです。では何故それが大切なのか？　家族というものが大きなキーワードになるように思います。

(1)責任を持ち育てる環境の整備(家族機能を社会が担う)

若者が暮らしを失う背景には、様々な理由があります。子どもから若者となり、親元から自立をしていく。本事業で出会った若者は大きく分類すると２つ。①児童養護施設の退所者や、元々世帯が困窮していて、社会に出た時に経済的な後ろざさえがない若者。②家族関係が悪く、生活環境に大きなストレス要因を抱え、自立に向けて助走し始めることが難しい若者。①の若者は比較的イメージしやすく支援対象と想定されやすいですが、②の若者は現実的には相当数存在するものと考えます。結果、準備不足のまま家を飛び出し、ネットカフェ難民・住み込みの仕事・ホームレスといった形で顕在化してきます。①・②共に言えることは、家族という痒いところに手の届く、セーフティネットは存在しません。制度など大枠での支援を受けることはできますが、これらの若者の将来を案じ、「責任を持って」育てる「人」がいないことです。私たちが出会ってきた若者の多くは、正社員として生活を安定させ、家族を築き、人並みの生活をしたいという若者がほとんどです。無責任かつ、一時的な夢のレールに乗せるような取り組みではなく、本人の望む「一般的な社会のレール」に戻るためには、多くの時間と「重い責任」のある取り組みが必要であると考えます。

(2)一人暮らし開始後の問題

ユースサポートハウス修了後、若者は一人暮らしを開始します。2019年度は、若者の入居支援も行ってきました。研修会を通じて、不動産会社の理解も進んだことや居住支援法人など新たな社会資源も出来たことで、住宅確保は比較的スムーズに進むようになりました。しかしながら、一人暮らし開始後は孤立する若者が多く、定期的な見守りや夕食会への参加なども促してきましたが、やはりマンパワー的な部分での限界があります。これからの福祉は地域共生社会の実現に向け急速に進んでいますが、若者が入り込む余地はあるのでしょうか？「誰でも参加できる場」・「全世代型」では、若者は参加しずらく、若者を想定した仕掛けがなければ参加しません。

ユースサポートハウスを利用した若者の多くが、支援の継続を望んでいます。これは、金銭的なメリットではなく、修了することで「つながり」が失われるのではないか？と恐れているからです。家族というセーフティネットを頼りたくない・頼れない若者にとって、「つながり」を実感できる場というのは非常に重要だと考えます。

(3)金銭教育

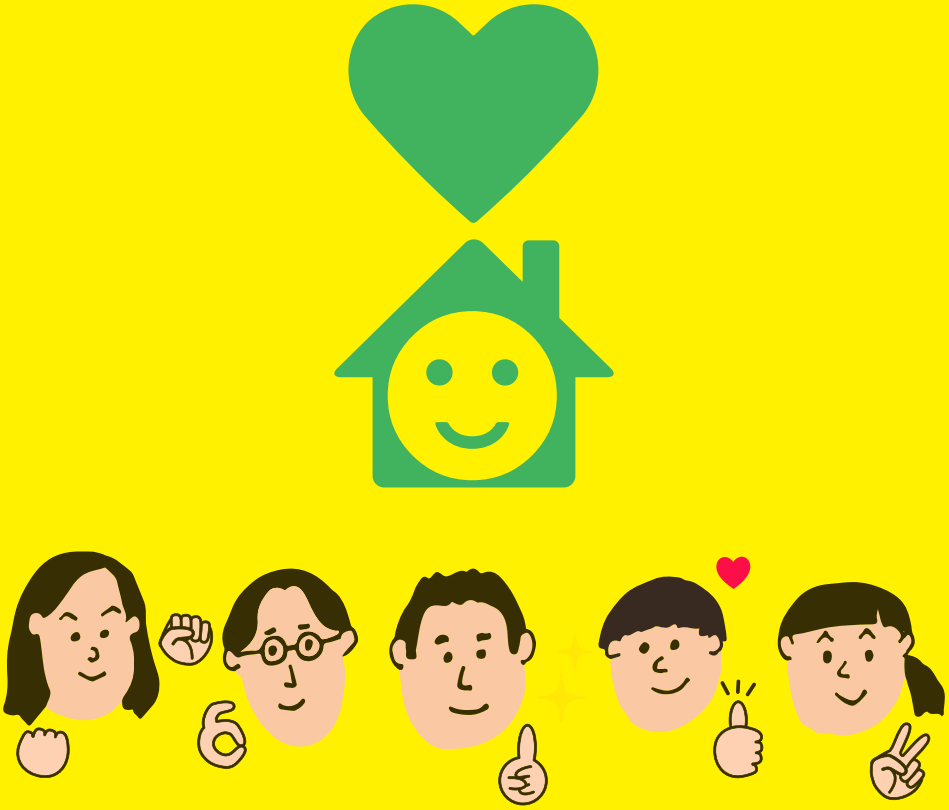
一人暮らしをするには、様々な生活能力が必要になります。学校教育や家庭の中で様々な炊事や洗濯、掃除など個々のスキルは身につきます。しかしながら、一人暮らしの中で実践するには「働きながら」になるため、総合力が試されます。また、一番の基礎となるお金の使い方は、学校教育や子どもの頃からのお小遣いの管理だけでは身につきません。ユースサポートハウス事業を通じて出会った若者は、炊事や洗濯・掃除などは出来る方も多いですが、お金の使い方を失敗し、生活破綻を起こした若者は少なくないです。具体的には、カードゲーム・携帯・Wi-fi・携帯ゲームなどの課金、フィギュア、アニメなどの趣味について最優先でお金を使う若者が多く、結果、家賃や光熱水費、税金、国民健康保険料の滞納などにつながっています。同様に食費や暖房費について、自身が我慢すれば済むため、お米だけで生活したり、食事を抜く、真冬に暖房をつけないなど、極端な生活をしている若者も多いです。

対策としては、支援付きの一人暮らしをしながら金銭学習を受けられる環境が一定期間必要であると考えます。金銭学習の中で、最低限生活に必要なお金の中に「趣味」に使うお金を想定することが重要と考えます。趣味について我慢だけを強いる、つまり余力がある者のみが享受できるという姿勢では、効果は薄いと考えます。

(4)多種多様な課題への対応

若者の生活支援の相談（ユースサポートハウスの利用）は多岐に渡ります。

子育て中のシングルマザー、障害を持った夫婦、高校在学中の方、精神科へ通院中の方、多重債務の問題を抱えた方など、様々であります。生活支援を行う場というものは、各種制度ごとにも設定されている場合も多いですが、そこに該当しなければ支援を受けることは難しく、ひとつの課題にしか対応できない支援施設が多いです。今後の生活支援・生活訓練の場は、誰でも参加・利用可能で、個々の状況に応じて必要な専門家がやってくる、といった視点が必要と考えます。



特定非営利活動法人
コミュニティワーク研究実践センター
札幌市中央区南８条西２丁目市民活動プラザ星園
TEL:011-511-1315　FAX :011-511-1316
HP: http://www.cmtwork.net/